看護研究報告：

外来化学療法室開設後の1年間を顧みて

野村昌代^{*}，村尾日都美^{*}，寺田英子^{*}

最近のがん化学療法は，入院期間の短縮と患者のQOLを重要視した治療の場の拡大が求められている。当院においても平成14年4月より化学療法専任チームを編成し外来化学療法室を開設した。専任スタッフによる治療や副作用パンフレット，自己管理ノートなどの患者支援ツールを用いた患者指導を実施して1年が経過した。

外来化学療法室の年間延べ治療人数1,213名のうち，利用した患者40名を対象にアンケート調査を行った。患者支援ツールの中で自己管理ノートを付けた27名の内22名は役に立ち，また，その中の17名は日記代わりに関心を抱いていた。副作用パンフレットについては活字に対する苦手意識から64%があまり利用しておらずパンフレットを見返しながら口頭での反復指導が必要であった。

看護師の役割は，患者の満足度を高める因子でもあった相談役割が大きな役割であった。患者のQOLを維持あるいは高めていくためには専門的知識をもって多角的に患者を支援していくことが望ましいと考えられた。今後も患者の満足度が高められるように，より患者のニーズに応えられるよう努力していきたい。

外来化学療法 外来化学療法治療室 患者満足度

・研究目的

最近のがん化学療法は，入院期間の短縮と患者のQOLを重要視した治療の場の拡大が求められている。当院においても平成14年4月より医師・専任看護師・薬剤師・栄養士・医事課スタッフによる化学療法専門チームを編成し，外来化学療法室の運用を開始した。

そこで，1年間を顧みて外来化学療法室の利用患者数・疾患別内訳など利用患者の概要と外来化学療法室で治療を受けた患者の満足度とニーズの把握を目的にアンケート調査を行った結果を報告する。

・外来化学療法室利用患者の概要

- 1) 月別延べ治療人数(表1参照)
平成14年4月の76名から次第に増加し年間では1,213名，1か月平均101.1名
- 2) 疾患別内訳(表2参照)
結腸がん42名，乳がん35名，直腸がん17名，胃がん15名，膵臓がん6名，肝胆管がん3名の順であった。

・研究方法

- 1) アンケート調査対象
平成14年4月より平成15年3月までに外来化学療法室を利用した外科外来の患者のうち，男性20名(平均年齢63歳)・女性20名(平均年齢60.3歳)を無作為に抽出した。
- 2) 調査方法
自書式アンケート法
- 3) 調査期間
平成15年5月1日～6月30日

^{*} 〒738-8503 広島県廿日市市地御前1-3-3
JA 広島総合病院看護外来
(受付：2004年1月30日)

表1．月別延べ治療人数

表2．疾患別内訳

結腸癌	42名
乳癌	35名
直腸癌	17名
胃癌	15名
膵臓癌	6名
肝胆管癌	3名

他の職種の役割に関すること
 外来化学療法加算に関すること
 治療環境に関すること

．アンケート結果

化学療法のインフォームド・コンセントについて（図1）

* 外来では基本的に化学療法は化学療法室で行われていることを知っていた12名。知らなかった28名。部屋の見学者 4名。

* 副作用について病棟で受けた患者14名で医師からが全員，看護師からが3名，外来で受けた患者21名，医師からが11名，看護師

4）アンケート内容

化学療法についてのインフォームド・コンセントに関すること

患者支援ツールに関すること

看護師の技術と役割に関すること

- 外来では化学療法は外来化学療法室で行われていることを知っていましたか？

- 誰から聞いたか？

- 部屋の見学はしたか？

- 副作用の説明はどこで受けたか？

図1

からが全員。

患者支援ツールについて（図2）

* 副作用パンフレットが役立った21名。あまり役立っていない及び役立っていない17名。理由は、活字を見たくない。直接その都度聞いたので読まなかった。活字は読まないのパンフレットを読み返すことはなかった。看護師がいるので聞いたほうが早い。読むのが面倒だった。字が小さい。読む内容が一般的過ぎるため個々のアドバイスを挙げて欲しかった。

* 自己管理ノートの利用については27名が付けた結果、22名が役立っていた。17名が日記代わりになる。自分のことで関心が持てた。治療中は継続して付けたい。他8名が治療薬の変更時のみ短期間付けたい。

自己管理ノートを付けなかった13名のう

ち少数意見に年老いているので書きたくない。副作用がないのでやめた。面倒になったが挙げられた。

看護師の技術と役割について（図3）

* 看護師に病気や治療に関連した不安や悩みを相談した34名。相談の内容は、医師の診察時に言えなかったこと。聞き逃したこと。家族の相談事などであった。技術について不安に思った8名。その理由は看護師が交代すること。血管が細いので針が入りにくく漏れ易いのではないかと。点滴速度や薬の間違いに全く不安が無い訳ではない。

他の職種について（図4）

* 薬剤師に説明を希望する19名。栄養士に希望する11名。心療内科の受診を希望する7名。ソーシャルワーカーに相談したい110名。

● 外来での副作用パンフレットは役立ったか？

役に立っていない（6名） 32% 役に立った（7名） 36%

あまり役立っていない（6名） 32%

● 自己管理ノートは付けたか？

付けてない（13名） 33% 付けた（27名） 67%

● 付けた人で自己管理ノートは役立ったか？

分らない（5名） 19% はい（22名） 81% いいえ（0名） 0%

● 付けなかった人の理由は

途中でやめた（5名） 38.5% 知らなかった（3名） 23% 面倒だった（5名） 38.5%

● 自己管理ノートは治療中は記入した方がよい？

薬の変更時のみ（8名） 32% はい（17名） 68% いいえ（0名） 0%

図2

- 看護師に治療の不安・悩みなどを相談できるか？

- 看護師の技術について不安に思ったことがあるか？

図 3

- 薬剤師からの説明を希望するか？

- 心療内科の受診を希望するか？

- 栄養士に相談を希望するか？

- ソーシャルワーカーに相談を希望するか？

図 4

- 化学療法加算を知っていますか？

- 化学療法加算がかかっても化学療法室で受けたいか？

図 5

外来化学療法加算について (図 5)

* 外来化学療法加算を知っている 4 名。知らない 36 名。しかし、外来化学療法加算がかかっても外来化学療法室で治療を受けたい患者 34 名。

治療環境について

* テレビがあることが嬉しい。電動ベッドが

楽であった。人目を気にすることなく帽子やカツラを取ることが出来リラックスした。静かで落ち着ける。看護師がいつもいるので安心。話を聞いてくれるので嬉しい。設備については、部屋が狭い。トイレが欲しい。通路が狭い。他の医療部門と離して欲しいという意見があった。

その他の自由記載された意見

* 入院するよりはまし。夜間治療があればいい。内服薬になってからの副作用の説明と対処方法についても改めて教えて欲しかった。長期になるとトラブルの対処方法など忘れていたことがあった。

* 看護師を評価した意見として、親切である。今までミスが無かったので今後も安心できる。よく説明をしてくれたので家族も自分も安心できた。同じ看護師なので安心できたと思った。

・ 考 察

自己管理ノートの利用と看護師に対する肯定的意見や経済的負担がかかっても外来化学療法室で治療を受けることを希望する患者が明らかに多かったことから患者満足度は高いと評価できる。

化学療法の実施場所と外来化学療法加算について、治療方針決定時あるいは治療開始前に主治医から説明を受けているにも拘らず、知らないと答えた患者が大半であったことが明らかになった。これは治療方針決定時あるいは治療開始前は治療の予定・副作用や予後についてなど内容が濃く、多くの情報が一度に提供されるため混乱が生じ記憶に残らないのではないかと考えられる。このことから外来化学療法室のオリエンテーションや化学療法加算について分かりやすく記載され同時に医師のインフォームド・コンセントを記入できるような用紙が必要ではないかと考えられる。

患者支援ツールである副作用パンフレットに

については利用しなかった理由からも活字に対する苦手意識が考えられる。よって、高齢者でも読みやすく理解しやすい内容のパンフレットに改善していく必要があることが分かった。また副作用の指導はパンフレットを見返しながら口頭で反復していくことが不可欠であると考えられる。

看護師の役割は、患者の満足度を高める因子でもあった相談役割が大きな役割を占めていることが分かった。また、看護師以外の職種にも相談したい意思があり看護師は他職種が患者の希望に沿って相談役割が十分に発揮できるよう、調整役となる必要がある。

外来で患者が満足の出来る肯定的環境で治療を受けることが望ましく、患者のニーズが浮き彫りになったことが今後の検討課題となった。

・ お わ り に

外来化学療法室を開設して1年間癌化学療法を受ける患者をチームでサポートしてきた。癌化学療法を受ける患者が長期にわたる治療過程の中で、QOLを維持あるいは高めていくためにはより専門的知識を持って多角的に患者を支援していくことが必要である。今回のアンケート調査で患者のニーズと検討課題が明確になった。より患者のニーズに応えるために今後も努力していきたい。

参 考 文 献

- 1) 辻 晃仁．外来での癌化学療法基礎知識ハンドブック．日経研究出版，2002．
- 2) 西条長宏監，渡辺孝子編，他．がん治療の副作用対策と看護ケア 第2版．先端医学社，2002．

Looking Back on the Past One Year Since the Opening of the Chemotherapy Unit for Outpatients

Masayo NOMURA^{*}, Hitomi MURAO^{*} and Hideko TERADA^{*}

The chemotherapy unit of our hospital came into existence in April 2002. Since then, we, nurses, have teamed up together in support of cancer patients who visited us for receiving chemotherapy. We investigated the use of the facilities during the first 12 months since the opening of the unit, and made a questionnaire survey to sound out the degree of the patients' satisfaction and needs. This paper describes our findings.

The number of patients who used the chemotherapy unit came to 1,213. The questionnaire survey were conducted on 40 outpatients who initially had visited the department of surgery of our hospital. Of the patient supporting tools, the self-help notebooks were utilized by 27 patients. Those patients who said they took nurses into their confidence numbered 34. They expressed their anguish and uneasy feelings in connection with the condition of their disease and treatment. The same number of patients replied that they wanted to receive chemotherapy even if extra charges were involved. From these findings, it could be said that the patients' satisfaction was great. However, it was also suggested that to obtain the informed consent from the patients there should be explanatory leaflet which explain the therapeutic procedure and additional fees in plain language, that repeated instructions about side effects should be given orally, and that nurses are required to occasionally act as moderators between the unit and other departments in accordance with the patients' wishes. These are some of the patients' needs. To fill them, further studies must be made.

^{*}*Outpatient Nursing Section, Hiroshima General Hospital, Hiroshima, Japan*